

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

巻頭言

「リバイバルを求めて」

(ぶどうの樹キリスト教会隠退牧師、聖書神学舎講師)

牧野 直之

三年半前にぶどうの樹キリスト教会を隠退した際、OMF からお祝いに頂いた“The Diary of John Sung”（ジョン・宋の日記）を最近読みました。白熱しているうちに皆さまに少しお分かちしたいと思います。

ジョン・宋は日本では余り知られていない人ですが、アジアを始め欧米では非常に有名で、神の人として尊敬されている中国人の伝道者です。

ジョン・宋は1901年に中国の福州で生まれ、1944年に召天しました。米国の大学に留学し、化学の博士号を取得した学術の面で非常に優秀な人でした。その後、米国で献身に導かれ、神学を学んだ後、中国に帰りました。

中国をはじめ欧米の幾つかの大学から化学を教えるように、という招きがありましたが、それらを断り、福音を各地で大胆に伝えました。日中戦争の只中、日本軍による危険を物ともせず中国の都市や町、村々で猛烈に伝道しました。よくこんなに過酷な旅行が出来たものだ、と感心するような行程で町から町へと移動して伝道しました。神は彼の伝道を大いに祝福し、行く先々で多くの回心者たちが起こされ、そればかりではなく大勢のクリスチャンたちの霊的覚醒が起きました。彼の働きは中国本土だけでなくとどまらず、台湾、フィリピン、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアまで及び、行く先々でリバイバルが起きました。

私がかつて説教奉仕をしたバンコクの幾つかの華人教会でも彼は伝道し、その働きを通して多くの人が教会に加えられていたことを知ったのは新しい発見でした。

米国で新生体験をしてから、たとえどんなに忙しくても克明に一日のことを日記に書き記すのが彼の日課でした。病気の時は、口述して書き記しました。なぜそんなにまでして日記をつけるのか、と友人に尋ねられた時、彼は「日記を書くことは、私の日々の神との歩みを助けるからだ。日記を書くと、私の心の目は開かれ、神の教えに驚か

されるからだ。」と答えています。膨大な量のこの日記は、家族が管理していました。ところが文化大革命の時、隠しておいたのに紅衛兵によって没収されてしまったのです。

が、神はこの日記を不思議な形で守られました。ジョンの娘が1970年北京の街角で知人の政府役人と出会ったところ、彼が没収されたジョン・宋の日記を返還してくれたのです。

日記を読んで私が教えられたのは、彼の伝道説教の内容です。神の前に私たちは罪人だということを強調し、罪の悔い改めを人々に迫りました。また、聴衆に道徳的な罪を告白し、悔い改めるようにも迫りました。その上で、イエス・キリストの十字架による罪の贖いを大胆に語ったのです。多くの現状維持で自己満足している教会やクリスチャンからは反発されました。ところが行く所行く所で、多くの牧師、伝道者たちが罪を悔い改め、何百人という人々がイエス・キリストを救い主として人生の主と信じ、生活が全く変えられたのです。ジョン自身も自分の罪の悔い改めを日記に記しています。そこには謙遜になること、自分の生活を日々点検し悔い改め、聖い生活を求める姿が浮き彫りにされていました。

それは出来事の記録より、霊的に教えられ経験したことが詳しく記されている日記です。自分が神と共に歩んでいるかどうか、毎日チェックしているのです。また、彼の日記は彼の祈り、感謝の祈りでもあります。神から受けた素晴らしい恵みをすぐに忘れる私は大いに反省させられ、祈りつつ毎日日記をつけようと思いました。まず私自身が霊的に覚醒され、キリストを中心にした聖い生活をし、日本のリバイバルのために祈り、福音をまっすぐに語っていこうと燃やされた次第です。



「夏期研修講座の報告」

聖書宣教会 校長 鞭木 由行

今年のテーマは「聖書信仰」でした。時宜にかなった問題であると考えていましたが、果たして、多くの方々が参加くださり、やむなくお断りしたケースもありました。日本の福音派が以前から内包していた聖書信仰をめぐる「ゆらぎ」が最近の福音主義神学会の研究発表や書物の出版から段々表面化してきているように思います。そのような危機感を覚えるなかでの開催でした。もう一度、福音主義が起源において持っていた「聖書信仰」とは何かということを再度確認し、同時に聖書信仰が今日直面している様々な諸問題を考えようと企画しました。各教師がそれぞれひとつずつセッションを担当し、その発表を通して、参加者がこの問題についての理解を深める有益な学びの機会であったと思います。その内容をここで詳しく紹介する紙面の余裕はありませんが、今回の研修会の各講義は出版の方向で準備していますので、詳しくはそれをご覧くださいと思います。

研修講座は、今年も久利英二先生の開会礼拝で幕を開けました。久利先生は「聖書信仰と私」と題して、ご自分の信仰の歩みと絡めた「体験的聖書信仰」を語ってくださいました。若き日に十全靈感を信じる聖書信仰に導かれ、聖書神学舎では舟喜順一先生のロマ書の講義によって聖書信仰を養われたとのことでした。しかし、ドイツ留学時代に経験したのはそれとは正反対のリベラル派の牧師の説教でした。事実として復活を信じてはいないけれども、牧師は復活を熱く語る事ができた、そのトリックは最後に「～と聖書に書いてある」とか「～がキリスト教の信仰です」と付け加えることでした。復活は事実ではないが真実であるという、事実と真実の使い分けは今日に至るまで用いられている手法です。

オリエンテーションを挟んで、最初の講義は赤坂泉先生による「聖書信仰の諸問題」でした。「聖書信仰」「言語灵感」「十全灵感」

などの用語を確認してのち、おもに日本において聖書信仰がどのように展開していったかを概観し、現在どのような問題に直面しているのかを明らかにしてくださいました。聖書信仰の歴史を振り返るとき、私たちは1960年に日本プロテスタント聖書信仰同盟（JEAの前身）が結成したことの重要性を覚えさせられます。このとき日本の福音派は改革派系もアルミニアン系もバプテスト系も、無誤性を認めた聖書信仰にしっかりと立っていたのです。それを母体として1960年代後期には、今日の日本福音同盟（JEA）や日本福音主義神学会（JETS）が誕生しましたが、その聖書信仰の立場は今日、曖昧なものになってきています。だからこそ70年代後半に起きた聖書論論争は日本の福音派にとって忘れられてはならない出来事でしょう。

次に伊藤暢人先生は「無誤性を巡る5つの見解」について、そのタイトルの本（原題 Five Views on Biblical Inerrancy）を紹介する形で講義してくださいました。五人の「福音派」の学者（アルバート・モーラー、ピーター・エンズ、マイケル・バード、ケビン・ヴァンフォーザー、ジョン・フランケ）が、それぞれの無誤性に対する見解を述べ、相互に批判しあっている書物です。無誤性の全否定から、無誤性の不可欠論まで、相互にこれだけ違いがあるのは驚くべきことです。ここで2番目に紹介されたピーター・エンズは今回の研修会を通してずっと論じられた人物でした。

講義の3番目は、津村俊夫先生による「福音主義神学における聖書釈義」でした。前回の福音主義神学会全国研究会義で発表されたものを土台に研修会でもう少し説明を加えて発表してくださいました。聖書の釈義の中で歴史性が曖昧にされている現実を指摘し、また五書問題、アダム歴史性など今日の聖書学の現状とその問題点を多岐にわたり論じて、そのような現状で、聖書信仰に立つ者たちが、聖書の著者である神

が、人間の著者を通して伝えようと意図されたことを理解するために、忍耐強く聖書のテキストに聞き続けることの重要性を訴えていました。

翌 2 日目は今年のゲストスピーカーである児玉剛先生が「聖書論と組織神学の関係：ピーター・エンズのアダム論より」と題して講義してくださいました。児玉先生は現在日本長老教会交野キリスト教会牧師です。先生は、ウエストミンスター神学校で学ばれ、その後ウェールズ大学から組織神学で博士号を授与されています。ウエストミンスター在学中に一度エンズ教授の講義を直接受けた経験があるとのことでした。ピーター・エンズは進化論を受け入れ、アダムの歴史性を否定し、どのように聖書と科学の矛盾を現代人に説明すべきかを考え、新しいアダム論を展開する 때가来たと考えています。また古い文書資料説を受け入れ、モーセ五書も、捕囚後の神殿礼拝再構築のために生み出された文書と見なしています。その結果、原罪も、罪の転嫁も否定しました。こうして、最終的には救いのないキリスト教を生み出したのです。ピーター・エンズは 1994 年からウエストミンスター神学校の旧約学の教授でしたが、2012 年に辞任しています。米国福音派の牙城であるウエストミンスター神学校でエンズのような人物が教授を長年務めていたということはそれ自体信じがたいことです。

その後全体討議で質疑応答の時間が持たれ、午後は自由時間。その時間を利用して、聖書研究のソフトである「アコードانس」紹介のセミナーも持たれました。

二日目の夜の講義は横山昌英先生による「物語神学と聖書信仰」でした。これは新正統主義だけでなく、福音主義のグループによっても現在積極的に取り入れられようとしていられる聖書解釈の手法です。その起源はやはりバルトにあり、その影響下にある人々によって発展させられてきました。聖書の中にある「物語性」に注目して聖書を解釈しようとしています。いずれにしても読者指向の主観的聖書解釈の危険の一つです。「物語」という概念は聖書に一度（ルカ 1:1-2）しか出て来ないもので、聖書の

歴史性を軽視したところから生まれ、育まれてきた神学です。

続いて、三浦譲先生が「新約聖書における旧約引用の問題」と題して講義し、マタイの福音書 2 章 15 節におけるホセア書 11 章 1 節の引用をどう理解すべきかを教えてくださいました。これは山崎ランサム和彦師が『福音主義神学』45 号において発表された論文「新約聖書における使徒的解釈学－現代福音主義への示唆－」に対する応答という形を取っています。従来、新約聖書が旧約聖書を引用するとき、新約聖書の著者は、旧約聖書の著者の意図や意味をよく理解した上で、その意味を損なわないように引用したと考えられてきました。しかし、山崎氏は新約聖書の著者は旧約の著者が知らなかった新しい意味を盛り込んだと考えました。果たしてそのようなことが本当にあり得るのか、というのが三浦先生の論点でした。結論的には、予型論的解釈を取るならば、新約の著者が新しい意味を持ち込んだと考える必要がないことを示してくださいました。ここにもピーター・エンズの影響を見ることができます。

最後の三日目は私が「キリストの権威と聖書」と題して、聖書信仰そのものを深めたいと願って講義をさせて頂きました。伊藤先生の講義の中に登場したジョン・フランケやスタンレー・グレンツなど「ポスト保守主義」と呼ばれる人々は、「基礎付け主義」のような前提から出発する議論を避けようとはしますが、私は矢張り私たちの信仰の創始者であり、完成者である主イエスから目を離すべきではないという立場です。そこで、主イエスがどのような聖書観をもっていたかということを経験的な根拠にしたいと思っていました。聖書の権威は聖書それ自体が証していることで、私たちが様々な権威付けをする必要はないでしょう。私たちも主の信仰に倣うべきであることを訴えました。このお方こそ最終の権威だからです。

最後では、総括を兼ねて、改めて聖書の無誤性の歴史的聖書の根拠を提示したつもりです。どうぞ、これから出版に向けて取り組む講義録の出版にご期待ください。

第32回教会音楽夏期講習会を終えて

石川 由紀子 (講師)

今年は32名の参加者を迎え、主の祝福の中に3日間の教会音楽夏期講習会を終えることができました。祈り支えてくださった諸教会の皆様へ感謝を申し上げます。

今年のテーマは「みことばと音楽 - 礼拝 -」でした。「礼拝」という用語の旧・新約聖書に共通する概念は「ひれ伏すこと」「仕えること」です。礼拝し、賛美を捧げる動機と根拠は神から来るものであり、神が主導者です。神に向かって賛美がささげられると同時に、賛美のことばがみことばの真理を宣言し、互いに教え戒める働きがあります。礼拝賛美の歴史を見ると、それは「音楽」ではなく、教会がいかにひれ伏し、ひれ伏さなかったかということがわかってきます。そのことを心に留めながら、賛美や奏楽、聖歌隊指導等の実践を学びました。講習会は閉会礼拝で締めくくられますが、そのプログラムは学びの応答でもあります。前奏、招詞、8曲の賛美、説教、祈り、後奏の全てが、みことばで貫かれていました。これは音楽

奉仕者による特別な礼拝ではなく、主の前にひれ伏し、仕える者の本質的な礼拝の姿と言えるのではないのでしょうか。

私は分科会の「作曲」「オルガン」の担当でしたが、講習会の前に、講習生の必要に応えられるだろうか心配していました。実際には、いつも主が豊かに教えてくださいました。しかし主は閉会礼拝のコロサイ3:15のみことばによって、私の能力ではなく、あり方を探られたのです。たとえ聖書から素晴らしい真理を伝えることが出来たとしても、自らがみことばに生きなければ失格者であると。講習生も講師もともに主の前にあり、主に教えられ、互いに教えられるひと時でありました。

年に一度、基本的な事柄や考え方を確認するのもとても良い機会です。来年は礼拝の責任を担っておられる牧会者・教職者の皆様も多数ご参加くださることを願っています。

教会音楽夏期講習会に参加させて頂いた恵み

藤井 由美子 (貝塚聖書教会)

ずっと、夏期講習会に参加したいと願っていましたが、親の介護、家庭の事情、大阪から遠いなどの理由から踏み出せずにいました。さらに聖書宣教会の優秀な先生方からご指導頂く講習会だから、私のように音階をドと認識する者でなくツェーCと認識する人が集まって、より音楽性を高めて行く所と諦めていました。でも「今年は行きたい!」と祈り始めますと、色々なことが整えられて、イスラエル人の前に道ができたように大阪から羽村市に道がつながりました。

講習会を終えて思うのは、できない、知らないことだらけだからこそ参加させて頂くと恵みが何倍もあるんだということです。

先生方は、未熟な私を上からではなく同じ高さまで膝をかがめてくださって、ご自分の持っておられるものを噛み砕いて教えてくださいました。分科会では石川先生から、奏楽者は神様だけでなく人、会衆にも

仕える者であること、また奏楽者も一礼拝者だから演奏しながら賛美すべき事を最初に教えて頂き、心の目が開かれた思いでした。そしてオルガンに触るのが練習と思い込んでいた私に、まずみことばに教えられ、賛美してみることに。楽譜を読み解き、音の表している意味、会衆のブレスを考える等を教えて頂き、これから自分のすべきことが示され、宝物のお土産を頂いた気持ちです。

全員で賛美し、胸に響く独唱、説教を聴いた閉会礼拝、このまま終わらないで欲しいと思いました。そしてお食事、ゼリー寄せなど毎回愛情のこもったお料理で心もお腹も満たされました。タクシーの呼び方を丁寧に書いてくださり、毎朝肅々とお掃除して下さるスタッフ、神学生の皆さん。神と人に仕えることを実践されていると思いました。姉妹方とのお交わりも楽しく、感謝のみの3日間でした。

夏期伝道実習

キャラバン伝道実習を覚えてお祈りくださり、ありがとうございました。また、私たちを受け入れてくださった、派遣先教会の皆様へ心からの感謝を申し上げます。

約1年前に現2年生全員で実行委員会を結成し、活動を進めてまいりました。はじめにコロサイ1:24-25のみことばが与えられ、「神からゆだねられた務めに従って、キリストのからだに仕える」というテーマを掲げることができました。教会に仕えることを通して神に仕えることが、キャラバン伝道の本質だと考えて取り組んでまいりました。

そして4つのチーム各々が、それぞれの場で教えられ、教会に仕えることの喜びを経験していただくことができました。このようにキャラバン伝道実習を導いてくださった主を、心から賛美いたします。

2016年度キャラバン伝道実行委員長 野村 啓祐

福音伝道教団 大間々キリスト教会(群馬県)

日程：7月9日(土)～17日(日)

野村 啓祐、岩崎 亙太郎こうたろう、山下 亮

私たちは、主に子ども達への伝道活動をしました。中高生の集会和小学生の集会を企画し、公道や駅前にて案内のチラシを配布しました。

中高生の集会では、開始の時間になっても誰も来ませんでした。私たちにとっては、まさに信仰が試される時でした。それでも「必ず来る！」と信じ、祈りつつ待っていると、なんと30年以上教会に来ていなかった50代の男性1名が来てくれました。神様は、教会での時間が高校生で止まっていた方のために、この中高生の集会を用いてくださったのです。

このような私たちの想像を超えた出来事は、神様の御業でしかありません。神様を心からほめたたえます。そして、後日行われた小学生の集会では、神様は多くの子ども達を教会へ導いてくださいました。

伝道の実を結んでくださるのは神様ご自身です。どんなときでもそれを信じていくことを、キャラバン伝道を通して教えられました。



奈良福音自由教会(奈良県)

日程：7月11日(月)～19日(火)

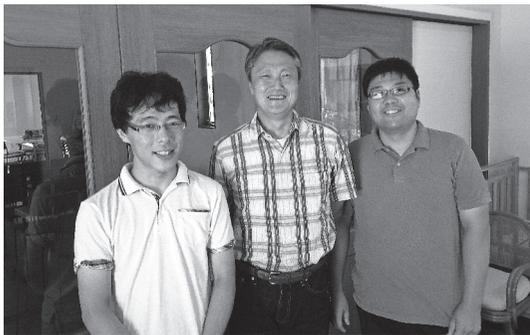
小山 敦史、中西 健彦、杉本 信

7月11日から9日間、奈良福音自由教会を訪問しました。小林久実師をはじめ教会員の皆様温かく迎えてくださり、毎日親しい交わりを持たせて頂きました。主な活動内容としては、婦人会・祈禱会・日曜礼拝におけるみことばの奉仕に加えて、地域へのチラシ配布、英会話クラスや子供向け伝道集会のお手伝いをさせて頂くなど、盛り沢山のスケジュールでした。チラシを見て初めて教会に来られた方に福音を語り、子供向け集会には約50名の子どもたちも集められ、福音の種まきの機会にも恵まれました。また、西成めぐみ教会を訪問して、釜ヶ崎伝道の現場を見せて頂き、根深い問題の渦巻く地域での働きが必要を覚えました。その他にも天理教本部を見学するなど、奈良における宣教の課題を教えられ、この地でどのように福音が広がるのか、と考えさせられました。大いに学び、大いに励まされる、実り多いキャラバン伝道実習でした。

日本福音キリスト教会連合 みらい平キリスト教会（茨城県）

日程：7月13日（水）～19日（火）
湯本 赦頼、清水 勝俊、丸毛 雄

私たちは開拓中のみらい平キリスト教会に遣わされました。この機に「やさしい聖書クラス」、「子育てママの会」、「伝道集会」が企画され、祈り、案内を配り、準備し臨みました。結局新来者は誰も来ませんでした。齋藤先生がこうおっしゃっておられたのが印象的でした。「開拓教会にはよくあること。しかし、必ず主が成し遂げてくださる。今回の集会も主のご計画のとおりなされたこと。」これは決して気休めでも虚しい励ましでもなく、実際の経験あつての言葉であり、教会員の方々も真摯に受け止めておられました。そして、これこそ教会開拓の働きそのものだと思います。先生は前任地の浦安の教会では、誰も来ない集會を何ヶ月も続けられたとのこと。私たちは本当に何もできなかったですが、先生と教会員の姿に多くを学び、また実際に用いられたことを嬉しく思います。何より教会の方々との暖かい交わりに励まされました。素晴らしい主の御業を褒め称えます。



日本バイブル・プロテスタント ともしび聖書チャペル（熊本県）

日程：7月15日（金）～26日（火）
三原 識文、山谷 寛人、藤本 仕光、阿部 真知子

私たちには、数多くの奉仕が与えられました。2泊3日の小学生キャンプに始まり、宮崎を縦断しながら、数々の祈祷会や家庭集會で証と説教をしました。また、被災地でのボランティア、えびの聖書教会でのアイスクリームパーティ、近隣の若者とのBBQ集會、聖日礼拝のご奉仕もありました。準備中は、「大丈夫だろうか？」と何度も思いました。

しかし、キャラバンを終えて振り返ると、何の問題もありませんでした。主は、このキャラバンの道中、すべてを恵みで満たしてくださいました。天候も守られ、子どもたちとの交わりも祝福されました。先生方との交わりにおいては、献身生活における、とても良い示唆が与えられました。みことばの奉仕も、子どもから大人まで、そして未信者から教会生活の長い人まで、幅広い人々に語る機会が備えられました。それぞれに語るべきことばが備えられました。一人ひとりに生きて働かれる主にただ感謝し、賛美いたします。



《夏の学舎点描》

- 単身寮は、7月のキャラバン伝道や教会音楽夏期講習会の期間中は出入りが多くて慌しく、諸行事が一段落した8月は対照的に静かです。学びや奉仕のために在寮している限られた人数は、ふだんの早天祈祷会ではなく、ラジオ体操！と共にささげる短い祈りをもって一日を始めています。家族寮には、それぞれの家庭のペースがあります。
- 8月、研修棟の廊下には献本の書籍類があふれました。精力的に整理がされましたが、秋にも作業は続きます。
- 学びに集中できる図書館が備えられていて感謝です。夏も、学舎の中でいちばん静かで快適な場所でしょう。
- 樹木や雑草の勢いが良いのはいつものことで、庭の除草がなかなか追いつきません。
- 猛暑のなか、植栽の管理のために来会して奉仕して下さるボランティアにただただ感謝です。
- 人の少ない夏の間に、受水槽の年次点検・清掃（断水を伴う）や、今年はチャペルの床の補修などがされました。
- 教職員それぞれ、ふだんとは違ったペースや場面で主に仕えて、恵みを経験してきたことでしょう。学舎の日常が戻ってきた9月を、主にあって共に歩ませていただきます。

「オープンデイ」のお知らせ 11月5日（土）

オープンデイは、授業や礼拝にどなたでも出席いただける「公開授業」の日です。申込は不要です。見学などの機会として是非お用いください。皆様のおいでを心よりお待ちしております。

	I ~ II 8:20~10:00	10:05~ 10:35	III ~ IV 10:35~12:15	12:15~
1年	旧約各書Ⅰ (伊藤暢人)	チャペル (榎木由行)	組織神学Ⅱ(神論) (榎木由行)	簡単な昼食の 提供があります (無料)
2年	組織神学Ⅳ(キリスト論) (赤坂 泉)		旧約研究Ⅰ(五書) (津村俊夫)	
3年	旧約研究Ⅲ(聖文書) (津村俊夫)		組織神学Ⅶ(終末論) (横山昌英)	
4年	新約研究Ⅱ(使徒の働き) (久利英二)		新約演習 (三浦 譲)	

(上記内容については、当日変更となる場合もあります。)

「賛美礼拝」のお知らせ 11月26日（土）14:30

今年の賛美礼拝は、イザヤ書55章の「神に帰れ。豊かに赦してくださいから」とのみことばから、主の全き赦しの恵みを覚えつつ、みことばの説教に耳を傾け、詩篇を中心として賛美を主にささげたく思います。是非今年も、この賛美礼拝に皆様の来羽をお待ちしています。

テーマ：主の打ち傷による全き赦し

聖書：イザヤ書55章6~8節

説教：久利 英二

曲目：

オルガン 装いせよ、わが魂よ(BWV654)(J.S.バッハ)

合唱 詩篇103篇 わが心 主をほめよ(H.シュッツ)

詩篇100篇 全地よ 主に向かい(岳藤豪希)

御神よ われは深き淵より(岳藤豪希)

新作賛美歌(石川由紀子) 他

オルガン 矢吹 綾子

合唱 聖書宣教会聖歌隊

詳しくは、聖書宣教会のウェブサイト <http://www.bibleseminary.jp/> の「行事や予定など」-「行事のご案内」をご覧ください。

教会音楽ミニ講習会について

礼拝の賛美について実践的に学ぶ「教会音楽ミニ講習会」は、会場を提供して下さる教会ないし運営奉仕者と聖書神学舎の教会音楽専攻委員会とで協力して開催するものです。今年度は、

9月22日(木・祝)に宇都宮聖書バプテスト教会で、

11月3日(木・祝)に衣笠中央キリスト教会で、それぞれほぼ同じ内容の講習会を開催します。

ご案内は該当地域周辺に限ってお届けしましたが、聖書宣教会のウェブサイトでご覧いただけます。また、他の地域でも、主体的に取り組んで下さる教会ないし運営奉仕者と協力して開催する可能性があります。お問い合わせ、お申し出ください。

《近況と祈りの課題》

- 学舎のためにお祈りくださる皆様を主に感謝します。
- 研修生と教職員の健康が守られるように。特に遠藤おる先生と中川朝子姉の闘病のために。一同、霊肉のすべての必要において主に信頼し、主に喜ばれる献身の日々を御前に重ねることができるように。
- 岳藤家から多数の書籍・楽譜類の献本をいただきました。岳藤照子先生の日常生活の守りを、また図書館のさらなる充実のために。
- 教師陣の世代交替のなかで、引き継がれるべき大切なものが見失われることなく継承されて行くように。
- 献身者が起こされるように。来年度の入会志願者が導かれるように。10月に新年度要覧が発行されます。

編集後記

夏の時季ならではの歩みを主が備え、支えてくださったことを感謝しています。紙面で数える恵みの他にも、事務局、図書館でも体制整備のために精力的な奉仕がささげられた夏でした。主に感謝しています。

それにしても、学舎の夏の短いこと。どこか後ろ髪を引かれる思いで、いくらかの課題を先送りにして秋の日常を始めざるを得ません。ただ主に期待して。皆様の歩みも主が顧み、祝して下さいますように。(A)